

2025 年度 特定外来生物チャネルキャットフィッシュの採捕状況

大植伸之（滋賀県水産試験場）

はじめに

チャネルキャットフィッシュは北米原産のナマズであり、大きいものでは全長 100 cm を超えることがある。8 本の口ひげをもち、魚類、甲殻類、貝類、水生昆虫などの底生動物を好んで食べる。茨城県霞ヶ浦ではすでに本種が大繁殖しており、テナガエビ、ハゼ科魚類等に対する食害、背びれや胸びれの鋭いトゲによる漁具の損傷や漁業者の負傷など、漁業や生態系に深刻な影響を与えていている。これらのことから 2005 年には「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」により特定外来生物に指定されている。

滋賀県内でのチャネルキャットフィッシュ生息状況

滋賀県内では 2001 年度に北湖で初めて採捕され、南湖では 2007 年度に、瀬田川洗堰下流（瀬田川下流）では 2008 年度にそれぞれ初めて採捕された。現在までに琵琶湖での繁殖は確認されていないが、2013 年度以降に瀬田川下流で採捕数が増加し、また 2018 年度以降には瀬田川洗堰上流（瀬田川上流）でも採捕数が増加していることから、この頃には瀬田川下流を中心としたエリアで繁殖し定着したことがうかがえる。2018 年度以降の水試調査では、産卵期と瀬田川洗堰の全開放流が重なった際に、瀬田川下流から洗堰を超えて遡上した親魚が瀬田川上流で産卵することが示唆されており、親魚および産まれた幼魚の漁業者による駆除活動が行われている。

2025 年度のチャネルキャットフィッシュ採捕状況

2025 年度の本種の採捕尾数は 2025 年 12 月末日時点で琵琶湖北湖 0 尾、琵琶湖南湖 12 尾、瀬田川上流 408 尾、瀬田川下流 342 尾であり、瀬田川上流および瀬田川下流では過去最多の採捕尾数となった。特に瀬田川上流の採捕尾数は昨年度の 13 倍、過去最多であった 2019 年度の 2.1 倍となっており、さらに上流にある琵琶湖への侵入が危惧される。また、瀬田川上流で採捕された個体のうち 2024 年産まれと思われる幼魚が 8 割を占めていた。このことは 2024 年は 5 月末から 7 月末の間に 4 度の全開放流が行われ、その後に 4 尾の産卵後と思われる個体が採捕されていたことから、複数の個体が産卵遡上し、それらに由来する幼魚が多数発生したためと推察された。

2025 年度の駆除の取り組み

滋賀県漁連では令和元年度から県の補助事業により延縄によるチャネルキャットフィッシュの駆除を行っている。今年度当初は 40 回/年の駆除を予定していたが、上記の状況を受け 90 回/年に変更して駆除が行われた。ピーク時には 100 針あたりの採捕尾数 (CPUE) が 8 に達したが、9 月以降は CPUE が 1 を切ることが増え、継続した駆除により低密度化したことが伺われた。

一方で、今年度も 6 月に全開放流が行われ、瀬田川上流ではその後 2 尾の産卵後と思われる個体が採捕されていることから、来年も多数の幼魚の発生が予想される。来年度以降も瀬田川上流での迅速な駆除につなげられるよう、本種の生息状況の把握に努めるとともに、定着し繁殖を繰り返す瀬田川下流での調査と駆除を行い、さらなる対策を検討していく。